

# 箱のなか

白練

# 涼虫の平日

---

消しゴム

---

私はひとの想いを消すことができる。それは想像を遥かに超えた厳しい仕事だ。

私は一度その想いをわが身に刻む。熱い。感情は、熱くてひりひりする。

私の持ち主は長くまっすぐな髪の良い女性だ。彼女は机に向かって恋人に手紙を書いている。

彼女は、あなたと別れたいと綴り、その文字に私をのせる。  
薔薇の透かし模様が入った白い便箋の上で私は小刻みに擦られる。  
ぱらりぱらりと私の断片が辺りに散る。同じことが何度となく繰り返される。  
彼女は涙を浮かべている。私はついもらい泣きしそうになり、ぐっと踏みとどまる。

私の断片を濡らすわけにはいかないのだ。それは便箋との固い約束だ。  
私たちは泣いてはいけない。仕事なのだ。

私は思う。あなたが消したい気持ちをここに好きなだけ書けばいい。全部きれいに消してあげる。  
私が焼けそうなくらい熱く苦しくても、どんどん形を変えて小さくなり、やがて消えてしまっても。

結局彼女は手紙を書き上げなかった。

私の先端がグレーがかっているのを彼女は見つめ、そっと便箋の上で擦る。  
最後の悲しみが私から剥がれていく。つるりと真っ白になった私を確かめて彼女はうっすらと微笑む。  
涙が目の端で光っている。

温かいお茶を淹れに彼女は席を立つ。しばらくは戻ってこないだろう。  
便箋と私は小声でおつかれさま、と挨拶を交わす。彼女の男、延命するかな？便箋がいう。  
きっとね。私は答える。彼女の気持ちは全部引き受けたから。

部屋の向こうで彼女が電話をしている声が聞こえる。時折笑い声が混じる。  
あれって...？  
私たちは顔を見合わせて、ひそかに笑い合う。

## ごはん道

---

ガスコンロにはいろいろな野菜が入った大きな鍋がクツクツと音をたてていた。

私はシンクの下にある一番下の引き出しを開ける。

そこは、マトリョーシカの入れ子みたいに重なるボールとザルがタワーみたいになっている場所。

その中からグリーンボールを取り出す。

ボールを取り出した引き出しの上の段を開け、小麦粉の袋を出す。しまい方が悪いのか、薄く開いた口から白い粉がフフッと舞い上がる。

グリーンボールに小麦粉を入れる。量は手が止まるまで。コツは少しずつ様子を見ながら入れること。

ボールに粉が入ったら水を入れる。

これも手が止まるまで。大抵、一回じゃ決まらない。一度入れた後、菜箸を使ってそろりとかき混ぜてみる。「ああもうちょっとだ」指がそう教えてくれる。

ボールの取っ手を持ち、菜箸でグルグルグルグルかき混ぜる。

よくかき混ぜると、内側からツヤッと水分みたいなものが出てきて、つるつるの玉の肌になる。あまりかき混ぜないと表面につぶつぶと「できもの」みたいなものが浮かんで思春期の肌みたいになる。

どっちがいいとか悪いとなく、どちらも美味しく、どちらも好きだ。

菜箸をスプーンに持ち替え、先端を水で濡らし、グリーンボールの中身をひとすくいしてクツクツと音をたてる鍋の中に入れる。

ポチャン

魚が泳ぐように小さく切った野菜達の間を縫って白い物体が底に沈む。

その沈む瞬間、ふっと音が消える。

1, 2, 3, 4, 5, , ,

ふわっと、ひとまわり大きくなった白い物体が浮き上がってくる。それを確認すると残りのボールの中身をせっせとスプーンで鍋に放り込んでいく。

「今日のご飯なに？」

「すいとん汁ー」

すいとんを作るたびに、いつも耳を思い出す。きくらげに「木耳」という漢字があるのなら、すいとんは「麦耳」。

たくさん耳たちが今日もお椀の表面に浮かんでいる。(ち)

## 涼虫の読書案内

---

U F Oが釧路に降りる 村上春樹  
(神の子どもたちはみな踊る 収録／新潮社)

---

あなたと暮らしているのは、空気のかたまりと暮らしているようなものだった。そう書き置きを残し、小村の妻は突然家を出て行く。それは小村にとって思ってもみない出来事だった。

小村は混乱がおさまらないまま離婚の手続きをし、一週間の休暇をとる。ちょうど同僚のササキから、釧路にいる妹にある荷物を届けてほしいと持ちかけられる。何の予定もなかった小村はそれを引き受ける。

それは茶色の包装紙で包まれた、10センチ四方の、重さのない箱。

小村は凍てついた二月の釧路に降り立つ。空港まで迎えにきたのは同僚の妹ケイコと友人のシマオさんだ。

小村は彼女たちと熱いラーメンを食べながら、出ていく直前の妻がずっと地震のニュースをみていたこと、釧路の知り合いがU F Oを見た後に失踪した話をする。そういうのって、どっかでつながってるんじゃないかな。

宿泊先まで案内されると、ケイコは先に帰り、小村はシマオさんとふたりきりになる...

「どれだけ遠くまで行っても、自分自身からは逃げられない」  
シマオさんはいう。自分は影のようにずっとついてくる。受け入れ難い事実を前にして、時間を稼いでも、距離を稼いでも。すぐ背後に絶望があり、振り向くことができない感じがひたひたと伝わってくる。

小村が運んできた箱の中身は何だったのか。それは彼の存在の危うさと重なる。今ここにいる自分は空っぽなのか。空っぽだとしたら中身はどこにあるのか。いつからなくなってしまったのか。

ストーリーを追いながら、ちりちりと何かを受信しているような感覚に陥る。たとえば啓示のようなものを。シマオさんはそれを伝える使者だ。それは自分という存在を認識するために必要なものと想像はつく。けれど両手で掴もうとすると、つるりと逃げられてしまう。

物語自体が息づいているような、鼓動が聞こえてきそうなほどの圧倒的な力を持っている。たったひとりでどこまでも続く白い壁にぐるりと取り囲まれていて、その壁に触れた感触がまだ手のひらに残っている。読後、そんな場所に自分が立っているような気がして、もう一度始めから読み直したくなってしまうのだ。

涼

今回は白練という色が  
テーマですが…

ち

**白練って純白とは違っ  
て暖かい**ですよねー♪

涼虫さんは？白ってど  
んなイメージ？

涼

私はね、**存在がまぶしい  
んです**。例えば服なら、

ある程度元気があ  
る日  
じゃないと身につけら  
れない。ポリウレムもか  
なり小さくするかな。コ  
ートとか無理。照れま  
す。対等になれない感じ  
というか。

へえ。私はね、**純白  
だと恐怖**というか**負の  
感覚**があるんです。打ち  
消すっていうか、柔軟性  
がないっていうか、**照  
れるってゆらのはない**  
んですよ。身につけて  
いると落ち着かない色、  
ベスト1(笑)かも、  
ちよっと病院のイメー  
ジがあるのかな？

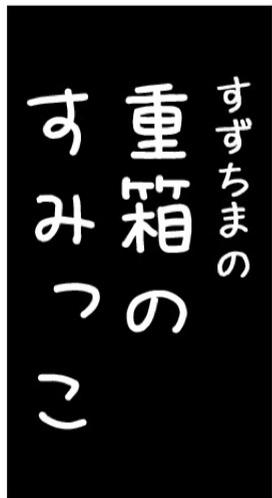
ち

私に比べてハードルの高  
いものを。

**真白ってまぶしくて、色じ  
やない**よね。後光が差すピ  
カーンみたい、色じやな  
い感じ。

私一度ね、自分のうちの寢  
室をホテルみたいにしよ  
うと思って寝具を無地の  
白で統一しようとしたん  
です。でもやめたの。

はははは(笑)



すずちまの

重箱の

すみっこ

涼

そうなんです、私と全然  
違う。白が強い力を持っ  
ている、という感覚は一致  
しているのかな。私、**白を  
抵抗なく身につけられる**  
**ひどって、何かを無意識に  
スルー**できるひとなんじ  
やないかって気がします。

私に比べてハードルの高  
いものを。

**真白ってまぶしくて、色じ  
やない**よね。後光が差すピ  
カーンみたい、色じやな  
い感じ。

私一度ね、自分のうちの寢  
室をホテルみたいにしよ  
うと思って寝具を無地の  
白で統一しようとしたん  
です。でもやめたの。

はははは(笑)

涼

私に比べてハードルの高  
いものを。

**真白ってまぶしくて、色じ  
やない**よね。後光が差すピ  
カーンみたい、色じやな  
い感じ。

私一度ね、自分のうちの寢  
室をホテルみたいにしよ  
うと思って寝具を無地の  
白で統一しようとしたん  
です。でもやめたの。

ち

はははは(笑)

涼

**全然、寛げなかつたんで  
す**。

私達、光に弱い夜行性の生  
物なんじゃないの？**網膜  
弱**いとか…(笑)でも、私、  
白練色なら多分、オツケー  
だよ。

あ！そこで逃げる気です  
ね！

まあまあ…すべて光の中  
に(笑)

ち

はははは(笑)



箱のなか (2014年初冬号)

HP : <http://suzuchima.url.ph/>

Twitter : [@suzuchima](https://twitter.com/suzuchima) ©すずちま企画

箱のなか（白練）

<http://p.booklog.jp/book/92852>

著者：すずちま企画

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/suzuchima/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/92852>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/92852>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ